茅風

Breeze from the field of thatch-grass

2005年5月30日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 14号

－　今号の目次　－

■第１回ﾌｨｰﾙﾄﾞｽﾀﾃﾞｨ兼「講座コモンズ村ふじわら」
○フィールドスタディ報告／高橋志津子・・・・・1
○茅葺きの民宿を建てよう／内藤勝久・・・・・・3
○講座コモンズ村ふじわら報告／海老澤秀夫・・・4
○野焼き片思い／相川高信・・・・・・・・・・・6
■野焼き実施
○野焼き２回目は大きく燃え広がった／川端英雄・6
○野焼きについて感じたこと／土田詠子・・・・・7
■「森林の市」出展報告／浅川潔・・・・・・・・・8
■第３回フィールドスタディのご案内・・・・・・・8
■編集後記－塾長のつぶやき－・・・・・・・・・9

■第１回フィールドスタディ兼講座「コモンズ村ふじわら」

◆*フィールドスタディ報告*

高橋志津子

4月22日（土）　水上降雪　（関東南部は雷、にわか雨）

１０：４０　一行上の原に到着。目の前に除雪車あり、昨日までのご苦労が偲ばれる。
みぞれ降る。一面の雪の原。

木村さん　挨拶と翌23日の予定を説明
昨日の雪のため、明23日の野焼きは中止して、5月7日～8日に延期する。今日は、野焼き予定地周辺の低木を伐採する。一般参加者へは会費を返却する、民宿のキャンセルも可。

水上町長挨拶
本日の中止は残念、恐縮している。水上町は10月に月夜野町・新治町と合併するが、自然を大事にすることを、ポイントにし、「みなかみ」とひらがなにすることに合意した。

阿部惣一郎さん　「山の口開け」を主宰。皆で今年１年の安全と豊かな実りを祈願

１２：００　昼食　（気ママ屋の美味しい弁当と温かい麦茶・・・おにぎり３ヶ、コロッケ２ヶ、正油卵、漬物～せり、からし菜の差し入れあって感激）

１３：００　大幽窟へ出発　　リーダー　広川さん

○カラマツの人工林・・・・いまはカラマツは大根一本より安い。切れば赤字。
○雪道（地面は見えない）
○桂の巨木ところどころにあり。切り株から出ている。直径15～16mくらいあろうかと思う桂もあった
○沢が見えなくなると急登になり「あと、どれくらい？」、「1/3　かな？あと2005歩」と信用できそうな、できなさそうな広川さんの答え、小休止するが雪に足をとられる場面もある。小学校低学年の姉弟がいちばん元気（群馬町から一家で参加した方でした）。最後までトップでした。

なんとか大幽窟へ到着
周辺のたくさんのつららと大きな洞窟がまず目に入る、氷柱も何本かあり、中は薄暗く神秘的でした。
つららで喉を潤し下山。天気が回復し、遠くの山々がはっきり見え、スキーヤーの姿も見られる。

１６：００　上の原に無事到着
たき火と気ママ屋の美味しいケーキがあり、疲れを癒してくれました

１８：００　夕食
山菜主体の夕食は格別に美味。山菜がいちばんのごちそうでした。

１９：３０　ミーティング,司会：木村、海老沢さん,地元：親男さん、万枝さん、惣一郎さん、武さん
○野焼きの昔とこれから、最後の野焼きについてなど
○消火方法・・・杉葉や木などではたく、火防線を作る。むかしは学校の年中行事で、4 メートル幅にする。小３位から作業に参加し、1日作業してキャラメル 2 ヶがお駄賃だった。（昭和７、１０、１１年生まれの地元の方々のはなし）（昭和 35 年ごろ、杉を１５本くらい売って乗用車を親に買ってもらった）
○組織的に野焼きをするというより、地区の人たちが頃合いを見計らい火をつけた。
○入山証を設けた。山菜取りに他所の人たちが入ってくるので、地区の人たちが交代で売る役に当たった。共有地の税金は区費から支払った。
○宝川温泉の小野氏が入会地の６５％の権利を有していた（小野氏は明治期に、木挽きとして来た）
○次回野焼き予定日
5 月 7 日は町のカヌーイベントがあって町のスタッフの協力が難しく、野焼きは 4 月 30 日とすることに決まる。
4 月 24 日（日）快晴
９：００　「ぐるっと藤原」探訪、水上町のバスで、林親男さん・中島武さんがガイド
○藤原の３大姓は、林、中島、阿部
○林姓の先祖は、１６８０年沼田城普請で材木を切り出すために、白川郷より職人が移住してきた
○中島姓は、中島氏の墓碑　「文治５年（西暦１１８９年）　本名　中島東嶽坊、奥平泉藤原４代泰衡の重臣後改中島孫左衛門之尉、藤原之秀利　藤原部落之祖　３４歳当地に逃げ、定住　享年８５歳」
○地蔵十徳
女人春産、身体倶忠、業病摩除、寿命延長、聡明智恵、財宝過登、旅人愛敬、穀物就熟、神明加護、託大著損
○赤城神社　さくらと夫婦杉
○雨呼山への県道はリヤカーが通るくらいの農道だった
○不動神社　赤松
○師入（もろいり）集落
縄文式土器が出土、今年の大雪で４～５軒家がつぶれた
前きりの家がある・・・・比較的裕福な家。２階に窓があり、外廊下がある
当時一般的にゴトウ（５間×１０間）の平屋だったそうです
姫座禅草の湿地帯あり、７月ごろ開花（花はざぜん草とは異なる）
水芭蕉２～３輪開花していた
○田尻集落　　下流にあり、水が原因で消滅
○中郷トンネル　　昭和３５年開削
○「みごもりの木」・・・栗とさくらがくっついている
○青木沢集落　武尊山登山の玄関口
○平出集落　　ダムのため４０世帯くらい水没
○大滝沢集落　ダム水没予定者が移住して出来た集落
○久保集落　　旧横山集落

・みそ玉・・蔵の軒下につるしてある、握りこぶしより大きめの変形三角錐状
大豆を煮て、つぶして固め、わらにくるんで吊るす。（吊るしている間に雑菌がつき、醗酵する）
秋に臼でつぶす。塩を入れ、藁沓で踏み、みそに仕上げる。麹を使用しないのが特徴
○須田貝集落　　日本百選集落のひとつ。材木を買い付けに来ていた赤城村の須田ヨヘイ（戦国時代）の名をとってつけた
○東電・須田貝ダム発電所を見学
○田に蛙の卵があった。ロープ状ではなく、馬糞状だった
１２：００「幸新」にて昼食（てんぷら蕎麦、山菜てんぷら蕎麦）
４月３０日の火入れを確認
上毛高原駅　１０：３０集合、昼食持参、火入れは１５時ごろを予定

◆茅葺きの民宿を建てよう

内藤勝久（「百年の森づくりの会」会長）

あと５分で上毛高原駅。とたんに睡魔が襲ってきた。ざわざわした空気で目が覚めたが後の祭り。長いトンネルを抜けるとそこは雪国だった。越後湯沢駅でうろうろしていると携帯電話が鳴った。「どこにいるのよ」と妻の声。事故にでも遭ったのではと清水さんからお電話があった由、さっそく淺川さんに連絡すると、「遅れてくる方がありますのでお待ちしています」。駅員に乗り越しの証明をしてもらい、上りの特急で無事上毛高原着。淺川さんの運転する車に湯本さん、カウボーイハットの滑志田さんと同乗させていただく。しばらくすると「野焼きは中止になりました」、と浅川さん。無情にも昨日雪が降ったのだそうだ。遅刻の後ろめたい気持ちが少し和らいだ。水上に入ると桜が満開。野焼きの中止は残念だが、花見ができるとはありがたい。

茅場につくとすでに作業が始まっていた。清水さんにご挨拶をし、すぐに鋸を借りて潅木の除伐にとりかかる。茅の刈り取りをスムーズに行なうためだ。(※)　茅場の雪は除かれていたが、まわりは１．５mほどの積雪である。２２ｈａという広大な緩斜面での作業も昼食をはさんで、あっという間に終了。山仕事には不慣れな都会人といえども人手が多いことは大きなパワーとなる。地元だけではとてもこうはいかないだろう。心のこもった弁当がまたうまかった。小食の私もおにぎり３個ぺろりと平らげた。地元の人が言うにはこのあたりは見渡す限りの茅山だったが、長らく手入れをしなかったので、自然植生が始まり、茅場は２２ｈａになってしまったようだ。

そこへ登場したのが森林塾清水。むかし村をあげて守ってきた入会地を、よそ者でも参加できる森林コモンズにしようという呼びかけに私はいたく共鳴し、すぐに入会させていただいた。そして素晴らしい仲間に出会うことができた。

作業が早く終わったので、力の余った有志約２０名が近くの大幽洞窟を見学に出かけた。見学とはいっても雪道の登りに１時間３０分。ちょっとした雪山ハイキングだ。私は非常食、水、ヘッドライト、磁石、雨具などひととりの装備をしていたが、大半の人は軽装で、吹雪かれたら遭難騒ぎを起こしていたかもしれない。全員無事に戻ったからよかったものの、雪山の行動は慎重にしたほうがよいと思う。

民宿「本家」には４時少し前に到着。「風呂は沸いていますか」と聞くと、ホテルのマネージャーのような上品な主が「４時半からと聞いていたので」。「早くなりませんか」。そばから「うちの人はスケジュールをきっちり決めて仕事をするので」と女将さんが弁護。滑志田さんと風呂上りに一杯やりましょうとの淡い夢が消えた。割り当てられた部屋で寛いでいると、「お風呂が沸きました」。二人で一風呂浴びて、すぐに大広間へ駆けつけ、先ずはビールで乾杯。至福の時が流れる。環境問題を肴にビールが進む。

夕食後に地元の役場の職員３人が加わって勉強会。森林塾のまじめな取り組みに感動。勢いに乗って私の持論を開陳。山村の過疎化を救うのは観光である。茅場は有力な観光資源である。あくまでも茅にこだわった村おこしが必要で、そのシンボルとして茅葺きの民宿を建てたらどうか。皆感動して聞いてくださっていると思いきや、国産木材で１００年の住宅づくりを提唱しておられる池田さんから「今の話はまるで感動がない」との厳しいお言葉。「感動がないのは当たり前、まだ仮説の段階ですから」。

酔眼朦朧とした頭脳を立て直して、どうしたら感動してもらえるかを考える。仮説とはいえ、私の考えはビジネスモデルに近い。あの茅場の清水が湧き出るほとりに、３０人程度泊まれる茅葺きの民宿を立て、そこを野焼きや刈り取りのボランティアの活動基地とし、空いているときは民宿にする。料理は地元の食材を使った旬の味。その時にしか味わえない地産地消へのこだわり。経営者は小さな子供のいる夫婦。村の若返りにも貢献する。インターネットで公募する。身分は水上町の職員。建物の建設資金

は水上町、設計は森林塾、建設は地元建設業者、集客は森林塾、イベントの企画は共同。事務局は水上町。

環境保全は世界の趨勢。外人も来たくなるような環境を整える。森林コモンズによって守られている茅場、茅葺の宿、地産地消の料理、温かいもてなしの心と温泉をセットにした観光は、従来型の温泉旅行に満足しない新しい顧客の発掘に繋がり、町の発展に貢献するに違いない。

翌朝、相部屋の黒田さんから、「埼玉県を農業県にしてはどうか、秩父の奥の倒産寸前のゴルフ場を買い取ってそこに百年の森をつくっては」といった貴重なアイディアをいただいた。千葉県環境学習アドバイザーの高野さんからは、さまざまな団体を取りまとめて一本に纏めることの難しさを学ばせていただいた。

観光組と別れて、私は相川さんとバス停まで藤原部落の自然や歴史を学びながら歩いた。相川さんは環境保全にまじめに取り組んでいる知行合一の好青年で、これからの活躍が期待される。のんびりと、しかし湖底に沈んだ部落の人たちの苦渋の選択を噛み締めながらバス停を目指す。ふと、さっき寄ったばかりの自給自足と独居の生活を貫いた雲越仙太郎の茅葺きの住居を思い出した。

茅の家の一人住まいや山笑う

茅葺きの民宿を皆の力で、一日も早く建てたいと思った。

※茅場としてのススキ草原の維持＝森林化の防止を主眼に行っています。・・・編集委員注

◆講座「コモンズ村・ふじわら」２００５報告 「野焼き」と「藤原めぐり」

海老澤秀夫

４月２３日（土）「野焼き中止」

突然の降雪で、上ノ原には新雪が積もっていました。本日の野焼きは中止です（実際の野焼き実施は４月３０日）。残念でした。

「山の口明け」は、予定通り阿部惣一郎さんの指導で執りおこないました。

野焼きの代わりに、カヤ場に生えこんでいるタニウツギを取り除く作業をしました。一般参加者も含め、大勢が参加してくれました。

作業のあと、武尊山の麓にある「大幽」へ。雪の中の歩行なので、けっこう苦労した方もいたようです。ごくろうさま。

４月２４日（日）「藤原をめぐる」

水上町の好意で出してもらったバスに乗り、藤原在住の林親男さんと中島武さんの「ガイド」で、藤原地区を巡りました。

●十王堂

民宿「本家」～応永寺～関ヶ原～「雨呼山」を右手に見て～藤原の小中学校～荻の入（おぎのいり）～原～師入（もろいり）へ。

「師入」集落にお堂があります。「十王堂」。十王は閻魔大王以下地獄の裁判官たち。私の知っている福井県のある村では、「じおうどう」と言って、集落のはずれ、峠道の入口ちかくに建っていました。三途の川ではなく、山向こうが「あの世」だったのでしょうか。師入の十王堂も、南東方向に山道が延びています。山向こうの「青木沢」集落への旧道です。いまではヤブに埋もれてしまっているようなのですが、実はこの山道、講座「コモンズ」の第３回（６月１９日）で探検する予定になっています。

●　ダムに沈む

バスはさらに進みます。今はなくなってしまった「田尻」集落～中郷トンネル～平出集落へ。

「平出」は比較的大きな集落です。藤原湖に沈んだ４つの集落の一部が移住してきたからだといいます。

「１６８０年、江戸で両国橋を作ることになった。その材木を切り出すために、林姓を名乗る職人集団が岐阜の白川郷から平出に移り住んできた」

平出集落には、こんな歴史もあったと中島武さんが話してくれました。

道沿いに、ダムに沈んだ集落から持ってきたという、いろんな「石」が並んでいます。「昔の人の、それぞれの切なる思いを込めて建てた石碑です」と中島武さん。石碑の隣には、「無事故地蔵と名付けられた地蔵の祠があります。そこには「地蔵十徳」と題した板が掲げてありました。ちなみに地蔵の十徳とは、（１）女人春産、（２）身根具足、（３）業病摩徐、（４）寿命延長、（５）聡明智恵、（６）財宝過登、（７）旅人愛嬌、（８）穀物就熟、（９）神明加護、（１０）託大菩薩、とのこと。合掌。

●　竹の分布が上昇

平出でバスを降り、しばらく藤原湖を眺めながら、ダムに沈んだ集落のことなど、林親男さんから話を聞きました。バスは来た道を戻って「久保」集落～「一畝田（ひとせだ）」集落方面へ。

「最近、竹が一畝田まで上がってきた」と林親男

さん。やはり温暖化でしょうか。寒さが厳しい藤原では、タケはかつて、もっと下流の「粟沢」というところまでしか見られなかったそうですが、それが拡大してきたというのです。大変です。

● 味噌玉

ストップ、ストップ。中島武さんがバスを止めます。道沿いにある民家の土蔵の軒下に、粘土のかたまりのような、大きさ２０センチくらいの「玉」が、ワラ縄にくくられていくつもぶら下がっています。不思議な代物です。想像がつきません。

「味噌玉」だと中島武さんが教えてくれました。茹でた大豆に塩を混ぜてつぶしたものを、玉にしてぶら下げているんだそうです。私たちが知っている味噌は、大豆とコウジと塩で作りますが、ここの「味噌玉」にはコウジが入っていません。ぶら下がっているあいだに、あたりを飛んでいる「菌」がくっついてくるといいます。さらに３カ月くらいぶら下げた後、桶の中に入れて塩と水を混ぜ、「ワラ靴」で踏みつけるんだそうですが、この過程でワラについている「菌」が混じって、味噌の発酵が促進されるようです。

● 須田さんが木を切りにやってきた

バスは、ダム湖から上がってきたという「大滝沢」集落～「久保」集落方面へ。久保は、郵便局があったり酒屋さんがあったりして「にぎやかな」集落です。ここもやはり、ダムで家が増えたとのこと。「横山」という集落の人たちが移ってきたといいます。

そして「須田貝」。かつては３０軒くらいの家があり、藤原の中心的な場所だったこともあるそうです。「石垣が残ってます。江戸時代、赤城から須田与兵衛さんという材木商が材木を買い付けにやってきて、木材の切り出しをしていた土地なんです」

中島武さんの話に、私たちはみんな「へぇー」と、本当におどろかされます。須田貝の名前にしても、須田与兵衛さんの話を聞けば納得です。でも「貝」は当て字でしょう、「須田買」だったのでは、と中島武さん。

● 中島家

バスはいよいよ「大芦」集落へ。中島武さんが民宿「雪割草」を経営している集落です。

中島家の先祖を祀ったお墓があります。積もった雪のなかから墓標が顔を出しています。

中島武さんによると、中島家は奥州平泉の藤原泰衡の末裔とのこと。１１８９年、源頼朝の奥州征伐にあって敗れ、５３人の一族郎党と共に藤原の地に落ち延び、後に、先住の者から「中島姓」を譲り受けたのではといいます。中島家以外にも、とにかく藤原には、さまざまな人が、さまざまな時代に、さまざまなところから入ってきては家をなし、集落をなして現在に至っているのです。

● 原風景

須田貝ダムから「明川（あけがわ）」集落へ。林親男さんが「藤原の原風景みたいなところ」と言う場所です。確かにいい場所です。特に、傾斜をなして広がる水田のまんなかにある「お墓」がいい。古墳のような土盛りがあって、墓標が立ち、大きな桜の木が１本、枝を広げています。生きている人にも死んだ人にも好ましいお墓の風景です。

明川には大坪義一さんが開いている「郷土館」があります。昔のいろんな生活道具が無造作に展示されています。「大利根仙人」という人形は大坪さんの作。なかなか愛嬌のある仙人さんです。

● ダンコウバイ咲く雨呼山

バスはいよいよ戻りの時間。明川から雨呼山の脇の峠道を越えていきます。雨呼山には、「藤原案内人クラブ」の人たちが作った遊歩道があり、入口には手作りの鳥居や案内板も建てられています。

山はちょうど「ダンコウバイが満開」と林親男さん。ショウジョウバカマの群落もあるそうです。

時間は１２時ちょっと過ぎ。お昼です。昼食は上ノ原のカヤ場近くの食堂「幸新」。

やれやれ。みなさん、お疲れさま。でも、とっても楽しくためになる「ぐるっと一周、ふじわらバスの旅」でした。小さな村の、こんな「バスツーリズム」が世界じゅうに増えると、いいですね。

◆野焼き片思い　　相川高信（UFJ 総研）

その日の朝、東京はよく晴れていて絶好のフィールドスタディー日和であった。上毛高原から水上町に向かう車の中から、行く手の重たそうな雲が見えて、「まさか」と言い合い笑ったが、フィールドの状況はぼく達の予想をはるかに超えて厳しいものがあった。地元と役場の方々が何日もかけて除雪し、地面を掘り出してくれたところに雪が再び積もっている。その日の野焼きは無理と判断された。

除雪を行わなかったところの雪の厚さを見れば、どれだけ地元の方がこの日のために準備をしてくださったのかが分かった。延期を決めた森林塾のスタッフ以上に無念であったのは、町長を始め、役場や地元の方々だったと思う。

昨年から話しに聞き、写真も何度も見て、参加を楽しみにしていただけに、延期はぼくにとっても、やはり残念であった。しかし、よく考えてみれば、そもそも週末だけでの日程調整は難しいはずである。本来は、毎日少しづつ確かなものになっていく春の中で、しかるべき時に行われるのが野焼きだったのではないか。気温、降雪、時間。様々な要素の中で火入れのタイミングは決定されていたのだろう。

実際、夜に行われた古老へのヒアリングでは、小学校の年中行事の一つとして行われていたなどの、村の生活に密着した野焼きのあり方が想像された。野焼きの時期を決める微妙な判断の前に立ちはだかる、水上と東京の距離にぼくはため息をつくしかない。来年こそは現場に立会いたいものである。

あくる日、バス停まで歩く中、雪解け水の流れる軽快な音が、村中に溢れていた。東京では桜もすっかり散ってしまったが、ここではフキノトウが顔を出している。下界とは時の流れ方が違うのだ。

結局、ぼく達にできることはせかせかした街の中で、遠い水上村の雪解けのタイミングを推し量ることだけ。当然、外れることもある。来年はふられないようにしよう。それでよいか、などと大らかな気持ちで、ダム湖までの道を降りた。

最後に難しい話を一つだけ。

日本における手入れの進まない森林問題を考えていくと、結局森林が個人の所有するものであるという点がぼく達の前に大きな問題として立ちはだかる。そういった意味では、所有を超えて、利用・管理の面から見て、森林を「コモンズ化」することには大きな可能性があるだろう。だからこそ、片思いかもしれないが、都市住民が山へ通うことの意味はそこにある。

昨今の森林塾青水を始めとする、市民活動はすでに森林を「コモンズ」として捉えて、実際に森林保全活動を行っている、とぼくは考えている。そろそろ、地道な活動からエッセンスを抽出して、分かりやすく世に訴えていく必要があると考えている。

■野焼き実施

◆野焼き２回目は大きく燃え広がった

川端英雄

先週 23 日、24 日無念の涙を呑んだ野焼き、30 日は薄もやではあったけれどまずは良い天気となり、集まった一同‘ほっ！’。

１時から型どおりの儀式はじまる。木村さん、池田隊長の挨拶、指示のあと、雲腰万枝総隊長の訓示、ついで２週連続ご出席の腰越水上町長のご挨拶。新生みなかみ町へ、森林塾のめざす地域丸ごと博物館の構想を無事伝えていただければうれしいな！

2 週連続の野焼きでかなり人が少ないのでは？との思いは吹っ飛ぶ。あとで聞いた大本営発表では 85 人。前週は 100 人だったと。ありがたいことだ。

ウツギなどの雑木は大半きれいに除伐されていて、今日はフィールドのあちこちに集めるだけ。もっとも‘フィールド外に集める’‘フィールドの適当なところへ集める’で、ブツブツもあったっけ。雑木整理をしながらふと眼をあげると、ややつ！一足先に望遠カメラの大放列が待っている。林好一さんの顔も見えているから、地元のカメラ愛好家「写友会」の皆さんだな。

やがて点火。去年より野焼きのスペースが広がったため、点火箇所も多い。さいわい茅も乾燥していてすぐに白い煙、そしてメラメラと広がる炎。炎は赤い。薄もやをとおして朝日山の積雪が白い。青空であるべき背景は残念ながらうす青い。カメラの放列から「カシャッ、バシャッ」の音。やがて陣形が乱れて、思い思いに散らばってゆく。

点火箇所が散在したためか、昨年の「ごおッ！」と天に駆け上ってゆく勢いの炎ではない。メラメラと地表をなめてゆく。馴れもあるせいか、なんだか静かに燃え尽きた感じ。

ブスブス白く煙っている箇所を、ひとつずつ枝で征伐。下のほうへ眼をやると、ジェットシューター

（袋が 5 ㌔、水が 15 ㌔合計 20 ㌔の重さ）を担いだ堂前さん、しきりに水をかけている。「4 回も水をいれたんですよ！」。　藤沢さんに次ぐ大食家とい

えども、かなりしんどいと思う。敬礼！

小生もそうだけれど、素人が鎮火にあたった後を点検する人がいなかったのは少し不安。
それと、中心地から離れると人がまばらになる。これで大丈夫かな？

無事終了。解散。今日はみなさん日帰りだから、ゆっくり話もできなかった。少しさびしい。
今回の反省。ウツギの根っこを切ったり、集めたりしている間に、のこぎりの鞘を失ってしまった。だいぶん探しまわったけれど見つからない。野焼きの火の洗礼をあびてしまっただろうな。申し訳ない。お詫びします。

◆野焼きについて感じたこと

土田詠子（林野庁経営課）

・煙がもうもうと出ているのに、咳き込む人もなく、臭いも臭くないのに驚きました。
・地面がぬれているせいなのか、得に消火もせずにあっという間に燃えていったのが驚きでした。
・消火が早かったこともあり、杉の葉で消火した部分はほとんどなかったのですが、杉の葉で本当に火が消えるのか疑問が残りました。
（消し方が下手だっただけかも知れませんが・・・）
・当日の作業よりも、事前の準備が膨大なのではないかと思い、事前準備にあたられた地元の方に感謝したいと思います。

上毛新聞

残雪と炎 鮮やかに

水上町藤原の上の原ススキ草原で三十日、カヤ場の野焼きが行われた。残雪の山と真っ赤な火のコントラストを写真に収めようと、多数のアマチュアカメラマンが詰め掛けた。

野焼きは、カヤ場を復活させ地域の活性化に役立てようと、地域住民や町役場、東京の市民団体「森林塾青水」が協力し、昨年約四十年ぶりに行われた。今回は関係者のほか、首都圏や県内から八十五人が参加した。

参加者は、地元の人から消火方法などの事前研修を受けてから、松明で火を付けた。雪の防火帯に囲まれた二㌶の草原は、瞬く間に炎に包まれていた。

上の原ススキ草原で野焼き　水上・藤原

残雪と炎が鮮やかなコントラストを見せた野焼き

産経新聞

都会と水上の〝入会地〟に

ススキ原で共同野焼き

里山の保全、再生に取り組んでいる東京の市民団体「森林塾青水」＝清水英毅塾長（六四）＝の会員と地元住民ら約六十五人が三十日、水上町藤原上の原のススキ原約二㌶で野焼きを行い、パチパチと草の焼ける音が里山に春の訪れを告げた＝写真。

現地は地元住民の入会地（共有地）として、かやぶき屋根や肥料で使うカヤを育てるために使われてきたが、過疎化のため約四十年前から放置されていた。そこで同団体が昨年、町有地約二十一㌶を借り、交流を深めながら再生に取り組んでいる。

野焼きは二週間かけて残雪を集め、豪雪地帯ならではの〝天然の防火帯〟を築いた上で行われた。清水塾長は「地元の人の指導を仰ぎながら、都会の人と行政が三位一体で行った。現代版の入会地になる」。参加した腰越孝夫町長は「大変ありがたい。都市との交流もできて一石二鳥だ」と話していた。

■「森林の市」に出展報告　浅川潔

代々木公園で５月末に行われていました「森林の市」が、今年は「みどりの感謝祭」と一緒になり、日比谷公園で４月 29,30 日に開催されました。森林塾青水では今年も水上町のテントを借りて以下のような催しを行いました。

①森林塾青水の紹介（パネル展示、リーフレット配布）
②木工品などの販売（広川氏、他地元木工家制作の木工品、阿部惣一郎氏のかんじき）、多葉田さん撮影の上ノ原の野鳥、昆虫、草花、また風景などの写真を絵はがきにして販売
③茅編み体験（茅編み機２台でミニ簾製作を体験し、持ち帰ってもらう）

２９日は、みどりの感謝祭の式典があり大勢の方が来場しましたが、３０日の来場者は半分ぐらいでした。２３日の野焼きが延期となり３０日に行われた結果、スタッフも半分に分かれて実施しました。２９日は講座コモンズの受講者や会員も大勢遊びに来ていただきました。売り上げは５２００円で、今回試験的に販売した絵はがきが意外と売れていました。今後は、風景、草花、野鳥昆虫、など５枚セットで封筒に入れて販売したいと考えています。お手伝いいただいた方々ありがとうございました。

■第３回フィールドスタディのご案内

第3回フィールドスタディのお知らせ

第３回フィールドスタディは、講座コモンズと合同で地域資源の調査に役立てる「藤原地区の路上観察会」と、現在は使われていない古道を探ります。今回の宿は会員である中島武さんのロッジ雪割草です。天然温泉をはじめ山菜や地元の素材・自家農園の無農薬野菜をふんだんに取り入れたこだわりの精進風田舎料理や郷土料理の宿です。

【第１日目】６月１８日（土）

時刻	内　　容	備　考
１０：３０ １１：００	上毛高原駅集合 民宿へ　　「藤原路上観察」調査の説明、調査準備	
１２：００	昼食	民宿
１３：００ １６：００ １６：３０	グループに分かれて調査 調査終了、民宿へ 調査まとめ作業	
１８：００	夕食	
１９：３０ ２０：３０	調査まとめ作業（続き） 調査結果グループ別発表会（パワーポイント使用）	

【第２日目】６月１９日（日）

時刻	内　　容	備　考
７：００	朝食	
８：００	古道調査（原・師入集落～青木沢集落） ・　林親男さんらの案内で森に埋もれた旧道を歩く ・　ササの葉の採集（９月のちまき材料）	
１１：３０	昼食（弁当）	
１２：３０ １４：３０ １５：３２	９月のちまき作り準備（乾燥作業など） 上の原のゴミ拾い アンケート、解散 たにがわ４４６（上毛高原駅）	林明夫さん指導

■集　合　上越新幹線「上毛高原駅」午前１０時２０分
　　車で来られる方は、現地に１１時１５分。
　電車：Ｍａｘたにがわ 435 号　東京駅８時４８分→大宮駅９時１４分→上毛高原駅１０時１５分

■参加費　１泊２日　８５００円（１泊２食宿泊代・２日昼食代・保険代含む）
　　日帰り８００円（昼食代、保険代含む）
■宿泊地　ロッジ雪割草群馬県利根郡水上町藤原 5536-1 TEL　０２７８－７５－２２１７
　　http://park1.wakwak.com/~r.yukiwariso/
■申し込み
　参加者は、宿泊か日帰り、交通手段（電車か自家用車）を明記の上、６月１３日までに
　メール又はＦＡＸでご連絡下さい。
■連絡先　森林塾青水　事務局　コミュニティ・デザイン内　浅川潔
　　E-mail: sinrinjyuku@fiberbit.net
　　電話 03-3408-8670／ファクス 03-5474-0847

編集後記－塾長のつぶやき－

　仕切り直しとなった野焼き。人智を尽くし、手間をかけオカネも使ったが、やはり昨年の様に一発成功とはいかなかった。だが、学ぶ所得る所も大だった。

◆　自然相手の仕事は自然のなりゆきに
　良い森、美しい森は人の手が適度に入ってこそ、とされる。良き茅場、美しいススキ草原の復元を、と始めた野焼き。昨年のふり返り反省のもと、早くから準備して地元の皆さんとの打合せも入念に行ない、万全を期して臨んだ。十二神さまにも晴天を祈った。が、季節はずれの降雪という自然にはかなわなかった。聞けば、その昔は雪解けの頃合いを見計らって、いとも簡単に火入れをしていたとの由。それが自然と上手につき合う先人の知恵であったのだろう。

◆　現代版“入会地管理委員会”の萌芽
　仕切り直しになったお陰で、地元―町当局―森林塾で構成するいわば“野焼き実行検討会”が都合３回も開催された。自然を相手に東京から大勢の参加者を受け入れてやるにはどうしたらよいか。地元責任者は（雲越）萬枝さん、町は観光商工課・木村主査、塾はフィールド整備リーダーの池田幹事を中心に関係者多数が真剣な討議をぎりぎりまで重ねた。来年はどのあたりを焼くか、野焼きに備えて秋のカヤ刈りをどうするか、といった事まで話しあった。これはもしかして、“上の原草原管理委員会”の原型では？　委員会の名称もない、委員としての任命も委嘱もないが、実態は既に地元住民（元・入会権者）―行政当局（現・地主）―都市住民（利用者）から成る現代版・入会管理委員会の役割を担い始めているのでは。

◆　大勢の人々と様々な思いが入り会った野焼き
　仕切り直しの日にも８５名の参加者があった由。二度にわたって、地元の皆さんや町の職員の皆さん、そして東京その他地域の一般参加の皆さん。写真愛好家やマスコミの方々も含め、おそらく延 200 人ぐらいの人々が上の原に足を運ばれたことであろう。つまり、昔の入会地とは違って様々な人々が大勢して入り会った。しかも、様々な思いをこめて入り会い散って行った。一般参加者の多くは、アンケートに答えて「来年も来たい。カヤ刈りにも参加したい」と記して帰られた。もとより塾生は毎年、足を運ぶ。こうして、“管理委員会”的な動きとも相まって現代版入会地＝コモンズのごときものが形成されていくことになると嬉しいのだが。

なに故に　ものくるほしや　木の芽どき　　（青）